



『こがね丸』に見る馬琴ばりの用字

小林, 祥浩

(Citation)

国文神戸, 3:70-76

(Issue Date)

1979-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481952>



『こがね丸』に見る馬琴ばりの用字

小林 祥 浩

巖谷小波の『こがね丸』（明治二十三年作）は刊行当初から馬琴ばりの文章と見られ、今日においても、そのように説かれているものようである。しかし『八犬伝』を熟読した眼をもって『こがね丸』を読むかぎり、この説には首肯しかねる。小波自身は回顧して『八犬伝』と『狐の裁判』とを編いませにしたと述べたというが、想の構えや筋の運びは明らかに黄表紙のそれであって、語句の綴りにおいて部分的に『馬琴ばり』が認められるにすぎない。小波が能く『八犬伝』に倣い得たのは用字のみであったと、筆者は見るとする。

『八犬伝』の用字には、筆者の調査によれば、次のような傾向が顕著である。⁽¹⁾

- (1) 漢字をなるべく多く用いようとする
- (2) 熟字をなるべく多く用いようとする
- (3) 通行の漢字をなるべく避けようとする
- (4) 古文献からの借用
- (5) 白話類の使用
- (6) 文脈上の要請による用字
- (7) 馬琴独自の用字

これらの用字は、原則として、漢字とその傍訓（義訓）によって有機的に成立しているのである。『こがね丸』についても同断である。

以下に『八犬伝』の用例を引きながら、馬琴ばりの用字を紹介する。

(1) 漢字を多く用いようとするあまり、かなで表記されるのが通行の、感嘆詞・擬声語・擬態語にまで漢字を用いる。

- 呀ア（こ・六回、八・百二十七回）、嗚ウ（こ・六回、八・一回）、
唳レ（こ・一回）、嘯ハ（こ・二回）、將カ（こ・六回）、啞エ（こ・六回）、
啞ア（こ・九回）、阿那ア（こ・四回）、喃ナ々（こ・十一回）、
呀嗟ア（こ・十六回）、
噫イ（こ・十回、八・二回）、丁チ（こ・十六回、八・十一回）、
噠ダ（こ・十六回、八・二回）、喘ヘ（こ・二回）、兵ヘ（こ・八回）、
呵々カ（こ・一回、八・五十九回）、呵々カ（こ・九回、八・四回）、
娑々サ（こ・四回）、發止ハ（こ・八回）、丁々チ（こ・八回）、哦嗟オ々々（こ・十二回）
閃ハ（こ・六回、八・一回）、估コ（こ・七回、八・一回）、虚々ウ々々（こ・六回、八・十八回）、莞爾カ（こ・七回、八・二十一回）、
徐々シ（こ・十二回、八・一回）、無差ム（こ・六回）、拂々フ（こ・七回）、
潸然セン（こ・九回）、寸留々々ス（こ・十回）、寸斷々々ス（こ・十二回）

『八犬伝』における感嘆詞・擬声語・擬態語の漢字表記は、ある

いは馬琴愛読の『源平盛衰記』『太平記』の影響によるものかもしれない。

(2)

通行では単字で表記される語に熟字を当てて用いようとする。同義あるいは類義の複合語、下位の字が接尾辞もしくは接尾辞的である複合語の二類が認められる。

- ①計策 (一・一回、八・五回)、嬰兒 (一・三回、八・九十一回)、
曉得 (一・三回、八・五十五回)、懇切 (一・三回、八・十九回)、
焦燥 (一・四回、八・五回)、肌膚 (一・四回、八・八回)、
過失 (一・六回、八・四回)、計畧 (一・八回、八・四回)、疾
病 (一・八回、八・十一回)、喜悅 (一・八回、八・七十五回)、
眺望 (一・十二回、八・十二回)、言語 (一・十三回、八・六十二回)、
眞實 (一・十三回、八・回外)、守護 (一・十四回、八・四十四回)、
咽喉 (一・十六回、八・二回)、守衛 (一・十六回、八・百三十五回)、
欣喜 (一・一回、自己 (一・三回)、力量 (一・三回)、
瞻昔 (一・三回)、間隙 (一・四回)、伴侶 (一・五回)、
動搖 (一・六回)、僂少 (一・六回)、救助 (一・七回)、
猜疑 (一・八回)、時期 (一・八回)、快樂 (一・九回)、
願望 (一・九回)、歸來 (一・十回)、事實 (一・十回)、
心魂 (一・十二回)、道理 (一・十三回)、邪惡 (一・十三回)、
自身 (一・十四回)、險阻 (一・十四回)
②主人 (一・二回、八・三十一回)、熾火 (一・四回、八・八回)、
竄動 (一・六回、八・八十三回)、頃日 (一・九回、八・十七

る複合語が見られる。

『犬伏』にはこのほか、反義の複合語と上位の字が接頭辞である複合語が見られる。

- 回、暫時 (一・二回)、孤兒 (一・三回)、外面 (一・六回)、
古代 (一・八回)、歸着 (一・九回)、暫時 (一・十回)、念頭
(一・十二回)、確乎 (一・十三回)、各自 (一・十四回)、寧
丸 (一・十六回)

(3)

傍訓のことは(国語)に該当する通行の漢字を避けた上で

①傍訓と語義の一致する本来の漢語

②漢語法に靠る熟字

③和製の複合語、和風の訓を施した漢語

を用いる。勢い、詰屈になりがちである。

- ①異 (一・五回、八・五十七回)、咬 (一・十六回、八・五十二回)、
層 (一・十一回、八・八十回)、件 (一・二回)、救 (一・二回)、
注 (一・八回)、祭 (一・十一回)、棲 (一・十二回)、
謎 (一・十四回)、咬 (一・十六回)、閉 (一・十六回)、縦令
(一・一回、八・百四十二回)、舉動 (一・一回、八・六十四回)、
旦暮 (一・二回、八・八回)、目前 (一・二回、八・四十九回)、
對手 (一・三回、八・一回)、大概 (一・三回、八・一回)、
古刹 (一・四回、八・四十一回)、由緒 (一・八回、八・二十九回)、
差別 (一・九回、八・一回)、冷笑 (一・十回、八・二回)、
赤心 (一・十二回、八・二十回)、白晝 (一・十二回、

八・二十七回)、月光(こ・十五回、八・九十回)、東道(こ・一回)、老人(こ・一回)、周章(こ・二回)、由来(こ・二回)、軟弱(こ・二回)、懇意(こ・二回)、凡事(こ・二回)、結局(こ・二回)、狼狽(こ・二回)、性来(こ・三回)、機會(こ・三回)、角鬪(こ・三回)、辨惡(こ・三回)、骨格(こ・三回)、尋常(こ・四回)、咽喉(こ・四回)、稜威(こ・四回)、朝夕(こ・五回)、獵師(こ・五回)、漂泊(こ・五回)、紹介(こ・五回)、翌日(こ・八回)、村童(こ・八回)、容易(こ・八回)、邂逅(こ・八回)、狡猾(こ・八回)、由来(こ・十回)、虚誕(こ・十一回)、下物(こ・十一回)、思量(こ・十一回)、稱贊(こ・十二回)、惡戯(こ・十三回)、所業(こ・十三回)、以前(こ・十四回)、虚談(こ・十五回)、俯伏(こ・十六回)、稱贊(こ・十六回)

②復讎(こ・一回、八・四十二回)、稱心(こ・一回)、切齒(こ・三回)、原野(こ・四回)、切齒(こ・八回)

③殊勝(こ・三回)、棲居(こ・五回)、贊詞(こ・五回)、棲居(こ・八回)、醉狂(こ・十一回)、氣疎(こ・十二回)、徴吹(こ・十二回)、神祠(こ・十三回)

右三種のうち、①は勉めて正字(本来の漢語)を用いようとする意識に根ざしたものであって、早くは秋成の『雨月物語』に看取することができる。②の「原野」は「のはら」の漢語、「復讎」「切齒」は動賓構造(△動詞△賓語△型)による複合語、「稱心」は動補構造(△動詞△補語△型)による複合語であって、ともに国語とは語序を異にする。③の「殊勝」「醉狂」は漢語ではあるが、本来

「けなげ」「ものずき」の語義は有しない。また「棲(接)居」贊詞「氣疎」「徴吹」「神祠」は、わが国において創られた複合語であらう。

(4)

馬琴は雅語および出典の歴とした漢字を用いるために、『和名抄』『下学集』『節用集』などの古辞書や『日本書紀』『万葉集』『源平盛衰記』『太平記』といった先行作品から、しばしば語彙を借りた。小波のばあいも、『こがね丸』執筆以前に『源平盛衰記』『太平記』『節用集』を読んでいた事が日記に見える。したがって次に掲げる諸字は、一、三を除き、小波が『八犬伝』に做ったものか、古文獻から借りたものかの、いずれとも決めかねる。

進(こ・一回、八・二十二回)、寤(こ・七回、八・二十五回)、軀(こ・十回、八・百四十三回)、黙(こ・三回)、挫(こ・五回)、點頭(こ・一回、八・二回)、耳頭(こ・一回、八・二十一回)、尋常(こ・一回、八・五回)、教園(こ・三回、八・一回)、有繫(こ・四回、八・七回)、求食(こ・十一回、八・五回)、髻髯(こ・十五回、八・六回)、白物(こ・十六回、八・三回)、早晚(こ・七回)、方便(こ・八回)、白地(こ・十回)、白地(こ・十一回) || 節用集

太(こ・五回、八・八十二回)、路上(こ・十一回、八・百二十八回) || 万葉集

忠(こ・十回、八・百三十四回)、側(こ・十一回、八・百一四回) || 日本書紀

羈^こ（こ・九回、八・三十五回）、未明^ま（こ・八回、八・五回）、

阿容^あ々々（こ・二回、八・一回）¹¹源平盛衰記

岸破^が（こ・十六回、八・五回）¹²太平記

鬻^ゆ（こ・十四回、八・五回）、強面^つ（こ・七回、八・十二回）¹³源平盛衰記、太平記

さらに、借用の類型についていうならば、

進^{しん}／側^{そく}／默^{もく}／忠^{ちゆう}／尋常^{じんじやう}／有弊^{ゆうへい}／髣髴^{ふふつ}／路上^{じやうじやう}／未明^{みめい}

は訓の借用、

窳^く／驅^く／挫^そ／太^た／羈^こ／鬻^ゆ／點頭^{てんとう}／耳語^{じご}／白物^{はくぶつ}／早晚^{さうばん}／方便^{はんべん}／白

地^ち／岸破^が／強面^つ／阿容^あ々々

は字の借用であらう。

(5)

『八大伝』において、馬琴は『西遊記』『三国志演義』『水滸伝』

『金瓶梅』などの小説から数百個の白話を借りて用いた。それは

『八大伝』上で『絵本西遊記』（簡本系『西遊記』の梗概訳）の執

筆者との白話くらべを演じて、おのれの「白話通」を世に誇示せん

がためであった。¹⁴小波のばあい、『こがね丸』を執筆するまでに、

すでに『剪灯新話』『西遊記』『水滸伝』を読み、漢学者の森槐南か

ら『西廂記』『紅樓夢』の講義を受けていた事が日記に見える。¹⁵し

たがって次に掲げる白話は、二、三を除いて、小波が『八大伝』に

倣ったか、小説類から借りたか、いずれとも決しかねる。¹⁶

①他（こ・一回、八・七十四回）、猜^さ（こ・五回、八・三回）、恠^が

（こ・六回、八・七十四回）、恠^が（こ・十二回、八・七十四回）、

恠^が（こ・一回、八・四十五回）、什麼^な（こ・一回、八・三回）、

舊地^{きゆうち}（こ・一回、八・四回）、霎時^{しやくじ}（こ・三回、八・一回）、本

事^{こと}（こ・五回、八・二十七回）、撲地^{ぼくち}（こ・六回、八・二回）、

不題^{ふだい}（こ・十回、八・二回）、管待^{くわんたい}（こ・十二回、八・二十一

回）、倣^{まね}（こ・十二回、八・二回）、一伍一什^{いちごいちじ}（こ・三回、八

・二十三回）、阿姐^{あに}（こ・二回）、¹⁷原來^{げんらい}（こ・二回）、¹⁸只見^{ただみ}（こ

・二回）、¹⁹却説^{せきせつ}（こ・六回）、²⁰斜廝^{せきし}（こ・七回）、²¹連忙^{れんじやう}（こ・八回）、

無神狗^{むしんくわう}（こ・四回）、²²失主狗^{しつしゆくわう}（こ・五回）

②吾們^{わがら}（こ・四回、八・三十回）、獸們^{じゆうのら}（こ・十回）、村童們^{そどのら}（こ

・十四回）

③咳一咳^{しはきちやくしやく}（こ・十三回）

三類のうち、①は詞（単語）。②は詞に複数を表わす接尾辞「們」

が接したものであるが、白話に「吾們」は存在しない。「我們」で

なければならぬ。²³③の「咳一咳」は動詞の重疊型（重ね型）であ

り、この形式は「一」の前後に単音節の同一の動詞を置き（△V△

一△V△型）、「ちよつと～する」という意味を表わす。『八大伝』

には「等一等」（八・二十八回）を初め十六個の用例がある。²⁴

(6)

読本『八大伝』は、漢文体・戦記文体・雅文体・浄瑠璃文体と、

場面に応じて文体が変わる。なかんずく情緒的な場面に採用される

ことの多い雅文体・浄瑠璃文体においては、読むための調子を重視

するあまり、諸々の技巧（音位律、音数律など）によって、語意の

表出が稀薄になりがちである。馬琴はその欠を、漢字と傍訓とから

成る、ことばの立体化をもって埋めようとした。

- ① 確(一・十六回)、四邊(一・四回、八・六十回)、發覺(一・十四回、八・五回)、狀態(一・二回)、容鉢(一・二回)、魂(一・四回)、彈丸(一・四回)、身軀(一・四回)、禽獸(一・五回)、怪我(一・六回)、同種(一・六回)、身邊(一・七回)、寵愛(一・十回)、白晝(一・十回)、守備(一・十三回)、遺兒(一・十四回)、親交(一・十五回)

- ② 他(一・四回、八・十一回)、退(一・十二回、八・五十二回)、没(一・三回)、在(一・十一回)、違(一・十五回)、生業(一・五回、八・五十九回)、疾病(一・七回、八・百四十八回)、醫師(一・八回、八・十三回)、右手(一・八回、八・二十四回)、左手(一・八回、八・十三回)、存命(一・九回、八・七回)、熟睡(一・十六回、八・二十五回)、承引(一・一回)、食物(一・一回)、空腹(一・一回)、臨終(一・二回)、死骸(一・二回)、養育(一・二回)、忠實(一・二回)、見入(一・二回)、數度(一・三回)、性質(一・三回)、競走(一・三回)、生立(一・三回)、肚饑(一・四回)、心配(一・五回)、不意(一・五回)、歸途(一・六回)、深傷(一・六回)、狂犬(一・六回)、性質(一・八回)、一目(一・八回)、御命(一・十一回)、侍妾(一・十一回)、先祖(一・十五回)、行方(一・十五回)

- ③ 饑渴(一・四回、八・三十五回)、首級(一・十六回、八・二十七回)、意恨(一・一回)、獸類(一・一回)、一件(一・三)

- 回、磚牆(一・四回)、歸途(一・六回)、厚意(一・七回)、草庵(一・八回)、便宜(一・八回)、會話(一・九回)、報恩(一・九回)、厚意(一・十四回)、昨夕(一・十四回)、先刻(一・十六回)
- ④ 有(一・五回、八・十五回)、雄(一・二回)、雌(一・二回)、胎(一・二回)、窠(一・四回)、鉢(一・八回)、繫(一・十三回)、閉(一・十六回)、太息(一・五回、八・四十八回)、雌雄(一・二回)、逡巡(一・六回)、功勞(一・七回)、鬱陶(一・七回)、風聞(一・十回)、功名(一・十回)、橫奪(一・十回)、他出(一・十五回)

右の四種類が立体化の実態である。①は国語(傍訓)の意味を漢字によって限定するもの。「状態」と「容鉢」「魂魄」と「彈丸」「身軀」と「同種」をそれぞれ対照してみれば明らかであろう。②は雅語や俗語などの難解と想われる国語(傍訓)を漢字によって註解したものの。「あだし」とは「他」の意味であり、「みすみす」とは「見えて在る」↓「目のまえにある(それなのに)」という意味である、というように。③は国語(傍訓)の意味を補充・拡大するために漢語が用いられている。左傍に△印を施した字が、語意の補充・拡大をする役を果たしている。「首級」は仇を討った「級(しるし)」にするべき首を表わし、「磚牆」は「磚(れんが)」の屋根を置いた「牆(ついじ)」を表わす。④は国語(傍訓)と漢語との間に相互補意的な効果を狙ったものである。それぞれ、有(もち・もの)、胎(みじもった・はら)、窠(擬人化された

有(もち・もの)、胎(みじもった・はら)、窠(擬人化された

鳥獸のすむ・こや²⁵巢、躰(からだの・うち)、繫(つなぎ・つける)、閉(扉がとるように・ふさがる)、太息(ふとい・とき²⁶ためいき)、雌雄(擬人化された動物の・ふうぶ)、逡巡(しりごみしつつ・ためらう)、功勞(尽力したことによる・てがら)、鬱陶(かなしい・ものおもい)、風聞(風のたよりに聞く・うわさ)、功名(てがらによる・ほまれ)、横奪(むりやり・よこどりする)、他出(そとで²⁷外出し・よそへゆく)といった意味であらう。

(7)

馬琴独自の用字として、次のものを挙げておく。

- 嘔^お(こ・二回、八・四回)、吻^く(こ・二回、八・五回)、網^す(こ・四回、八・二十七回)、勳^{いたは}(こ・六回、八・十三回)、鮮血^{ちしほ}(こ・八・一回)、胡慮^{あはれ}(こ・三回、八・十一回)、斷離^き(こ・六回、八・四回)、雀躍^こ(こ・八回、八・六十三回)、啣言^{くち}(こ・九回、八・九十五回)、佛々^{かたぐし}(こ・十回、八・五回)、悶擾^{もど}(こ・十一回、八・六回)、動搖^ど(こ・十二回、八・七十回)、憂苦^{うれ}(こ・十三回、八・十一回)、果敢々々^は(こ・二回、八・四十一回)

なお「這奴」は白話「這厮」の「厮」を「奴」に換えたもので、

筆者はこれを変態白話と名づけている。変態白話は白話を変形して成ったものであって、記憶の曖昧あるいは書肆の誤刻といった偶然的な産物ではなく、作者の意図(遊板・術学等)に出た必然の創作

である。「八大伝」において馬琴は数十個の白話を創って用いた。²⁸

さて小波は『こがね丸』において、上述のような²⁹馬琴はりの用字を見せ、自身も独自のものを創り出した。

- 層^ま(こ・二回)、株^か(こ・十二回)、計^て(こ・十四回)、悶^も(こ・十六回)、寔宿^と(こ・一回)、體態^て(こ・二回)、詮術^せ(こ・一回)、只在^と(こ・六回)、豆萍^ま(こ・八回)、落着^と(こ・八回)、姦俊^あ(こ・十回)、社合^せ(こ・十一回)、咬切^く(こ・十四回)、撲大師^い(こ・四回)、無賴猫^ど(こ・七回)

これは馬琴がそうであったように、漢字の素養と繊細な用字意識の賜ものといえよう。しかしながら、次に掲げる十二個の用字はいずれも誤用としなければならない。

- ×^や郵(こ・一回)、^や呀(こ・八回)、^な在命(こ・二回)、^せ無艦(こ・四回)、^も土豚(こ・四回)、^け跌踢(こ・六回)、^た立在(こ・七回)、^は竄點(こ・十回)、^は剽桃(こ・十六回)

は漢字の誤りで、正しくは

邸、牙、存命、無饑、土龍、跌踢、立地、竄點、剽桃
 であらう。また「呻吟」(こ・六回)も、文脈からいえば「漂泊」(こ・五回)の方がよからう。「狎」(こ・九回)は「狎」^せであらうし、「蔓羅」(つるとなつたつた、こ・四回)を「つたかづら」と訓むのは無理であらう。

▲注▼

- △1▼ 『八犬伝』の用字法については、早く麻生磯次博士の研究がある（江戸文学と中国文学、三六九〜三八六頁）が、筆者はこれに拘束されない。
- △2▼ 別訓「端」(二・十三回)
- △3▼ 別訓「發止」(二・十六)
- △4▼ 別訓「咽喉」(二・十二回)
- △5▼ 「層」(八十回)
- △6▼ 「復讎」(八・四十二回)
- △7▼ 「氣疎」は「氣疎」の転用であろう。
- △8▼ 詳しくは拙稿『八犬伝の用字』(視座、1〜3号)
- △9▼ 太平記(戊子日録、己丑日録、庚寅日録)、盛衰記(己丑日録、庚寅日録)、節用集(庚寅日録)
- △10▼ 小波が『八犬伝』から借用したのは「太」「路上」「忠」「側」の四個、また「黙」「挫」「方便」は直接『節用集』から借用したものと見てよからう。なお「早晚」「白地」については、『八犬伝』に「早晚」(三回)「白地」(四回)の用例があるので、小波が『節用集』「八犬伝」のいづれに做ったとも断言できない。
- △11▼ 「進」「鬻」「尋常」に限っては、馬琴にとつて、中世以降通行の用字であった。また「阿容々々」は擬態語、「岸破」は擬声語。
- △12▼ 『絵本西遊記』初編は口木山人の訳(文化三年刊)、二編は山士信の訳(文政十年刊)、三・四編は岳亭五岳の訳(天保四・八年刊)。口木山人・山士信・岳亭五岳と馬琴との白話くらゐについては、拙稿『八犬伝の白話をめぐって』(日本中国学会報・第三十集)に詳しい。
- △13▼ 勇灯新話(丁亥日録)、西遊記(戊子日録)、水滸伝(庚寅日録)。西廂記(己丑日録)、紅樓夢(己丑日録、庚寅日録)。
- △14▼ 「斜寝」「無神狗」「失主狗」の三個の白話は『八犬伝』その他の馬

琴の読本に用例を見ないので、小波が小説類から借用したものであらう。

- △15▼ 「阿姐」(八・五十回)
- △16▼ 「原来」(八・二回)
- △17▼ 「只見」(八・百四回)
- △18▼ 「却説」(八・二回)、「却説」(八・百八回)
- △19▼ 「連忙」(号張月)
- △20▼ 文言「吾」の複数形は「吾儕」「吾曹」(二・五回)などで表わされる。
- △21▼ 詳しくは拙稿『八犬伝の白話をめぐって』(前掲)
- △22▼ 「身軀」(八・百六十七回)
- △23▼ 「一件」は数量構造(数詞・量詞の複合)。国語においては量詞(助数詞)の発達が遅れていたため、▲一||量詞▼の複合語を量詞にかかわることなく、「ひとつ」と訓むことが多かった。たとえば、
一片、一口、一枝、一面、一隻、一頭、一頓、一艘、一匹、一箇
を『日本書紀』では「ヒトツ」と訓み、『八犬伝』にも「一箇」(二十一回)、「一顆」(三十二回)などが見られる。
- △24▼ 「八犬伝」の訓は「憂苦」(十一回)、「憂苦」(十九回)
- △25▼ 変態白話については、拙稿『八犬伝の変態白話』(国文神戸、2号)に詳しい。
- △26▼ 白話「只見」を「とみれば」と訓している(5)④の条)から、この語にヒントを得たか。漢語「只在」を「とある」と訓するのは無理。

▲文献▼

- 明治文学全集20(筑摩書房)
- 南総里見八犬傳(日本名著全集)